
恋愛競走 アラシのヨルに

梶原ちな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

恋愛競走 アラシのヨルに

【Nコード】

N2706B

【作者名】

梶原ちな

【あらすじ】

あたしにだってニガテなものはあるけど、助けてなんて言えるわけない。なのに、口をついて出たのはアイツの名前で。

たすけて。
なんて、いえるわけない。

やけに、雨音の強い夜だった。
打ち付ける音は、この胸をも刺激して震え上がらせる。

そうこうしているうちに窓の外では、黒を引き裂く光が走ってその音を轟かせた。

「じよ、冗談でしょ……」

地震カミナリ火事ナントカと怖いものランキングが昔から言われてきたけれど、あたしもその例外ではなかった。

稲妻が割った空。

すぐさま響いたドンっという衝撃音に、声を上げて耳を塞いだ。

カーテンをさっと引いて、耳を塞いだまましゃがみこむ。

情けないことに、ヒザががくがくとなにが面白いのか笑っていた。

いつそう酷くなった雨音。
耳にいたいカミナリ。

けれどあたしは自分の体を抑えこんで、必死に耐えようと努力していた。

「こわくないこわくないこわくない」

自分でもおかしいと思うけれど、要は気持ちの問題だと思うわけ
で。

自己暗示に懸命に挑んでいるものの、その効果は薄い。

本当は下の部屋に行って、こわいと叫びたい。

だれかに助けてと行ってしがみつきたい。

だけど、今日にかぎって。

というかほぼ毎日だけど、アイツがいるのだ。

そんなこと、絶対にできない。

「こわくないこわくなっ、こわ……っく」

カミナリがあたしの頭上をめぐがけて落ちている。

そうだ、まちがいない。

だってこんなに大きい音で、ありえないくらい光っているし。

あたしがいったいカミナリに対してなにをしたっていつの。

クラスでは委員長を務め上げ、成績だって悪くない。

どちらかといえば優等生で生きてきたし、周りだってそう思っ
ている。

最近はやからぬウワサが学校どころかご近所まで浸透しつつある
けれど、それはカミナリとはカンケイない。

そんなことをぶつぶつと考えていたそのとき。
特大の、今夜いちばん大きい雷鳴が部屋を駆け抜けた。

思わず悲鳴を上げたあたしの声はかき消され、同時にバチンと電気が消える。

「やっ、てていでん!？」

視界ゼロ。

見えるのはカミナリのひかり。

一瞬の出来事にすっかりパニックだったあたしは自分でも予測できなかった行動に、出てしまった。

「た、たいとつっ! 泰斗、たすけてっ」

耳を塞いで目を閉じてアイツの名前を叫んだ。
口を押さえたときには、もうすでに遅かった。

「……つか、呼ぶの遅せーから」

真っ暗でなにも見えなかったけれど、目の前の空気が揺れてアイツの声が聞こえた。

「素直に呼べっつの。俺、ドアの外で待機してたんだぜ。昔っからカミナリギライだもんな、ゆいちゃんは」

よしよしとばかりに、頭をなでられて。

子ども扱いが非常にシャクに触ったけれど、なんだか複雑な心境で怒る気になれない。

「そ、そこにいたなら、なんで来ないのよ。バカ」
「かわいい声が聞きたかったの。結果オーライだったけど」

顔を上げなくてもわかる。
いまコイツ、にやにやしてる。

最近のあたしはすっかりこの幼馴染に負けどおしなのだ。

告白されて、まともに返事もしていない現状。

周りが勝手に盛り上がっているだけで、これといってとくに進展はなかった。

だけど、あたしは一度負けたと思ってから、すっかり弱くなってしまう気がする。

どうも以前のような強い自分でいられないのだ。

そんなときに、よりもよってニガテなカミナリ。

呼べるわけがなかった。

このバカをこれ以上、調子に乗らせるわけにはいかない。

そう思っていたはずなのに、思わず呼んでしまった自分に腹が立
った。

あたしは、こんなんじゃないのに。

「うっさい！ もうひとりで平気だから、アンタなんてどっかに
」

イラ立って口走った言葉が、カミナリにかき消される。

その光と音に体の中から揺るがされたあたしは、目の前のモノに

思いっきりしがみついた。

「……とにかく、あそこいくか」

カミナリとほぼ同時に叫び声を上げるあたしの手を強く引いて、泰斗は立ち上がった。

そのままずるずると引きずられて、隣の部屋に入る。

わけもわからないうちに腰をつかまれて、あっというまに持ち上げられた。

次の瞬間にはやわらかい感触とほこりっぱいにおいがたちこめて、ようやく現状を確認する。

「狭いんだから、つめろって」

「お、押入れ？」

「覚えてねえの？秘密基地」

よいしょという掛け声とともに、体をすみに押しやられた。

腰を落ち着けた泰斗がふすまを閉めると、もう何も見えなくなってしまった。

「秘密、基地？」

「マジで覚えてないのかよ？ カミナリ専用秘密基地じゃねーか」

カミナリセンヨウヒミツキチ。

「ああ！」

ワントンポ遅れて、よみがえった景色。

小さい頃、カミナリが怖くて、音の届かない場所を探したときに

ここを見つけたんだった。

「おいおい、お前が見つけたんだろ。お、ケイタイ見つけた」

泰斗がごそごそと動いて、取り出したケイタイを開く。

瞬間、淡いひかりが広がって、身をかがめるようにして押入れに収まる彼の顔が見えた。

「ゆい、泣いてんの？」

目じりを通り過ぎる伸ばされた指に、体がふるえる。

水っぽい感触が消えて、目の前の顔が心配そうにあたしをのぞきこんだ。

「泣いてないわよ！」

ぼつと火がつくようにのぼりつめた体温。

遠く響く雷鳴。

それよりも近い、こいつの呼吸。

暗くてよかった。

こんな顔、見られたらたまらない。

「そもそも、どうしてアンタまでいつしよに入ってるのよ！ 狭いじゃない」

「こんなオイシイ機会、俺が逃すと思ってるの？」

ケイタイのディスプレイの光が消えた。

再び、闇に包まれるセカイ。

心臓の音だけがリアルで、こんなにもうるさい。

「なあ、俺のこと、呼んでくれたのはどーして？」

答えにつまる。

あたし、なんてワナに引っかかったんだろっ。

「ごっじゃ、逃げられない。」

「……っ、バカ」

「バカだから俺、勘違いするよ」

手をつかまれた。

汗ばむ手が恥ずかしくて振りほどこうとしたのに、それ以上の力で握られる。

「キスしていい？」

「いや」

「即答かよ」

「あつたりまえでしょ！」

なんとかこの雰囲気壊そうと努力するものの、どうにもならず。今まで張ってきた意地がもろくも崩れそうだ。

致命的なミス。

ごまかしてきたことが、あばかれそう。

カミナリが鳴って、怖くてとっさに呼んでしまったのは。そんなの、この鼓動が痛いくらい教えてくれている。

ぐるぐるとめぐる思考。

もう、冷静に対処できない。

暗闇になれてきた目でふと視線を上げれば、向かいの熱い視線とぶつかった。

体が硬直して、動かない。

「あ、クモがいる」

沈黙を破るように開かれた口から飛び出した言葉は、またもやあたしの思考回路をぐるぐるにした。

あたしはカミナリの次にクモがダイキライだからだ。

「え！？ や、やだっ」

あわ立つた背筋に声を上げて、向かいの泰斗にしがみつく。
だまされたと気がついたときには、彼の腕のなかで身動きが取れなくなっていた。

「……う、そつき」

真っ暗な空間。

ふたりつきり。

「うん。ごめん」

こもる熱は、どうしようもなくあたしを焦がす。

「キスしていい？」

いやだと言えなかったのはくちびるをふさがれたからなのだ、と。

そう必死に自分に言い訳するあたしが、バカみたいだった。

「おとーさん、おかーさん。俺、ここの息子になれそうな気がしてきましたっす！ 今後もよろしくお願いしますっす！」

「ちょ、なにいつてんの!？」

「挨拶だろ。こういうことは事前にだな」

バカのバカみたいなセリフが、ウチどころかご近所までに響き渡り。

カミナリよりコイツのほうが恐ろしいと、あたしはしみじみ実感したのだった。

(後書き)

カミナリもクモも平気です。

ゴキブリはどうしてもダメですが。。。

完結した恋愛競走の番外編みたいなものです。
短編としてもお楽しみいただけると幸いです。
ご感想いただければ幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706b/>

恋愛競走 アラシのヨルに

2008年11月7日07時28分発行